ドイツ語・英語の前置詞句内名詞句の無冠詞形と融合形

吉　田　光　演

広島大学大学院総合科学研究科

Artikellosigkeit und Kontraktion in deutschen und englischen Präpositionalphrasen

Mitsunobu YOSHIDA

Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

Abstract: In diesem Aufsatz geht es um eine syntaktisch-semantische Analyse der artikellosen Nominalphrasen (NPs) sowie der Kontraktionen in Präpositionalphrasen (PPs) im Deutschen und Englischen (*at school/in hospital/by bus* bzw. *zu Hause/im Krankenhaus*). Die Verbindung von Präposition und Nomen (P-N) in beiden Sprachen und die Kontraktion von Präposition und Artikel (Determinator) im Deutschen (P-D) wie in *zur Schule* sind bisher als Ausnahme oder idiomatische Verwendung eingestuft und mehr oder weniger ignoriert worden. Aber P-Ns mit erst vor kurzem entstandenen Nomina wie *mit Kreditkarte/ohne Zuschlag* zeigen, dass diese Struktur durchaus produktiv ist und syntaktisch-semantischen Gesetzmäßigkeiten unterliegt. Ich untersuche hier aus kontrastiver Sicht P-Ns im Deutschen und Englischen und P-Ds im Deutschen und komme zu folgenden Ergebnissen: 1) In einigen Fällen lässt sich in P-Ns bei den Nomina ein Wechsel von „zählbar“ zu „unzählbar“ beobachten, aber auch zählbare Nomina kommen vor. 2) In beiden Sprachen treten P-Ns als adverbiale Nicht-Argumente auf, während Argument-PPs generell P-Ns ausschließen (mit Ausnahme von Ziel-Argumenten wie *go to school/ zur Schule gehen*). 3) In lokalen PPs haben P-Ns und P-Ds verschiedene Funktionen: indefinite Lokalangabe mit stereotypischer Bedeutung (*in hospital/im Krankenhaus liegen*) oder generisch interpretierte Lokalangabe (*Smoking is forbidden on campus*.). Der Artikel wird unterdrückt, weil die adverbial fungierenden PPs nicht referenziell sein müssen und somit keinen Artikel erfordern. 4) Das Englische hat mehr P-Ns als das Deutsche, dagegen gibt es im Deutschen im modal-kausalen Bereich mehr P-Ns und P-Ds als im Englischen (*auf Antrag/aus Anlass/unter Androhnung*).

Key Words: prepositional phrase, determiner/article, nominal phrase, contraction, definiteness, argument

1. 研究対象・目的 [1)]

名詞句(nominal phrase: NP)が文中に生じる環境としては，主語や目的語など動詞の項(argument)であることが多いが，他にも前置詞(preposition: P)

の補部(目的語)になる場合も多い．前置詞Pと名詞句NPは前置詞句(prepositional phrase: PP)を形成し，PPは，動詞が選択する項または随意的要素である副詞句・付加部(adjunct)として機能する．

(1) a. Hans wartete [auf den Gast/Peter].
(=Hans waited [for the guest/Peter].) 項
b. Hans wartete [in einem Hotel].
(=Hans waited [in a hotel].) 付加部

項であれ付加部であれ，P補部に生じるNPは，単数可算名詞の場合には，冠詞（一般化すれば限定詞(determiner: D)）を必要とする．ここでNPの代わりに，限定詞Dを主要部とする限定句DP (Determiner Phrase, Abney 1987)を用いれば，次のような統語構造となる．

(2) a. PP → P DP b. DP→ D NP
例: $[_{PP}$ $[_{P}$ for$][_{DP}$ $[_{D}$ the$][_{NP}$ guest]]]
cf. *$[_{PP}$ $[_{P}$ for$][_{NP}$ guest]] (*=非文)

ドイツ語では，der, das等の定冠詞がPと隣接する時，Pと定冠詞の融合形 (*zum*<*zu dem*, *zur*<*zu der*, *ins*<*in das*等)になることも多い(融合形＋名詞をP-D融合形と略す)．P-D形は，前置詞句の中で前置詞Pと定冠詞が融合して音声的に縮約した形であるが，統語範疇としてはPP(=P+DP)に属する[2)].

(3) {zu dem/zum} Hotel
$[_{PP}$ $[_{P+D}$ zu(~~de~~)m] $[_{NP}$ Hotel]] (=to the hotel)

P-D融合形が現れるかどうかは別として，P補部が<限定詞＋名詞句>として実現することは，補部に最大範疇としての限定句=DPが要求されるので当然のことである(2a).
しかし，ドイツ語や英語では，前置詞補部の環境下で限定詞が付かない変則的な無冠詞名詞句が生じることが多いのも確かである．例えば，次のような例がそれである．

(4) auf Antrag, zu Hause, nach Hause, bei (zu) Tisch sitzen, auf Deck, ohne Zuschlag
at home, at school, at sea, at table, by bus, in jail, in hospital, on campus, on deck
(アメリカ英語ではgo to the hospital/in the hospitalのようにtheが付くことも多い)

またドイツ語では，完全な定冠詞と名詞句のPPよりも，*ins*や*im*のようなP-D融合形が好まれる傾向もある．(5)で完全な定冠詞が現れると，定冠詞に強勢が置かれ，指示対象が強調される（「他でもないあの映画館（病院）」指示代名詞的な機能）．

(5) ins Kino gehen/ in das Kino gehen（映画館に行く vs. その映画館に行く)
im Krankenhaus sein/ in dem Krankenhaus sein（入院している vs. その病院にいる）

このような用法は学校文法でも知られているが，詳しくは研究されておらず，例外的現象として扱われてきた(Himmelmann 1998)．前置詞+無冠詞名詞句を「P-N形」と呼ぶこととして，いかなる場合にいかなる理由で，どんな意味でP-N形が（またはP-D融合形が）生じるのか？一つの答えは，P-N形は，冠詞が確立する前の古い時代の表現が固定化したイディオムであり，文法の中心から逸脱した例外現象であるというものである. 確かに，高度に文法化した結合，例えばan Hand/anhand（をもとに）, an Stelle/anstelle（の代わりに）, auf Grund/ aufgrund（に基づき）, in Folge/infolge（の結果として）のようにP-N形が融合して語彙化したものもある．このような表現は，個々の名詞の実質的意味が希薄化しているので，確かにイディオムとして扱うべきであろう(Meola 2000)．しかし(6)のように，新たに登場した名詞においてもP-N形は生産的に作られる．従って，単純にすべてのP-N形をイディオムとみなすことはできない(Kiss 2007).

(6) *auf CD-Spieler* abspielen CDプレーヤで再生する
mit Computer コンピュータで
mit Kreditkarte クレジットカードで
ohne Zuschlag 特急券なしで
ohne Auto leben 車なしで生活する

名詞句の側から見ると，無冠詞形がなぜ特定の前置詞句に生じるか，その場合どんな意味が派生するかという統語的・意味的問題が生じる．具体的には(7)のような問題である．

(7i) P-N形の名詞は，不可算名詞として分析できるか？できるとすれば，可算から不可算への意味的な転換が起きているのか？

(7ii) P-N形の名詞が可算名詞だとすれば，NPはどのように統語的に認可されるのか？

(7iii) P-N形，P-D形の意味は前置詞と名詞の意味から合成的に算出できるか？その意味的特徴はなにか？（習慣的・ステロタイプ的意味？）

(1)で見たように，PPは項にも付加部にもなる．項は指示性が関与し，限定句DPとして現れる(Longobardi 1994)．他方，付加部では指示性が要求されず，その場合，限定詞が不要になり，P-N形が生じる可能性がある．意味的にはP-N形のステロタイプ的意味がいかに得られるのか(de Swart & Zwarts 2009)，また他の意味があるかどうかも問題になる．

これらを検討するため，2節では(7i)の不可算化の問題を考察し，3節で(7ii)のP-N形の統語論を扱い，4節では(7iii)の意味論を検討し， 5節で問題を全体的に考察する．

本稿では，主にドイツ語のP-N形と融合形を扱うが，適宜英語のP-N形と比較することとする．なお，新聞・雑誌記事の見出しに頻出する空間意味のP-N形は，見出し特有の省略表現であるので，本稿では扱わない(Auto brennt unter Brücke vollständig aus「車が橋の下で完全に炎上」)．また，ドイツ語の機能動詞結合(Funktionsverbgefüge)に現れるP-N形式と動詞 (kommen, stehen, bringen, stellen, setzen等の軽動詞）も本稿の枠組みを超えるので扱わない（mit X zu Rande kommen「うまく処理する」, X in Betrieb stellen「設置する」, X in Bewegung bringen 「動かす」, X zum Ausdruck bringen「表現する」等）.

2. 不可算化の可能性

(7i)の問いに関して，Bier/beerやSalz/saltのような不可算名詞の場合は無冠詞で項として認可されるので問題ない．可算・不可算の対立は究極的には，文中の名詞句の機能に与えられるので，名詞自体の絶対的特性ではない(appleは可算にも不可算にもなる, Borer 2004)．しかし，物質名詞のようにデフォルトで不可算，動物・人間を表す名詞(dog, boy等)のようにデフォルトで可算を表す名詞のように，名詞は可算・不可算の特性を潜在的に持つ(appleはデフォルトで可算だが，I put *apple* in the salad.のように冠詞がなければ不可算に転換する)．デフォルトで不可算である名詞は，P補部でも当然無冠詞になる(Flaschen mit Bier abfüllen「瓶にビールを詰める」)．従って, 本稿ではデフォルトの不可算名詞は考察の対象外とする（もちろん*vor Angst*=「不安のあまり」のような付加部としての前置詞句内の不可算名詞も当然問題にならない）.

しかし，可算・不可算両方の解釈を元々持つ両義的な名詞もある．(8)では，Boden (土地，基盤), Kraft (力, 勢力), vacation (休暇)が境界性のない不可算名詞として扱われる．一方，これらの名詞も複数個に分割され，その中の一つの個体として扱われる場合，on *a vacation* (ある特定の休暇で)のように可算化される．(9)では，一つの語彙がある場合に可算名詞として解釈され(Kontrolle「検査」), 他方で不可算として解釈される(Kontrolle「監視」）(Kiss 2007, 2008)．後者の不可算解釈への転換は，unter(「下で」)のような空間関係を表す前置詞の比喩的解釈によって促進される（「一定の力（量）の従属・条件下」)．これは，前置詞の補部という条件によって一般的に引き起こされるのではなく，unterのような特定の前置詞の比喩解釈によるものと考えられる(4節参照).

(8) an *Boden* gewinnen 勢力を増す
in *Kraft* treten 効力を発する
I am here on *vacation*.

(9) a. *die Kontrollen* verschärfen （個々の）検査を厳重にする (複数形＝可算)
b. unter *Kontrolle* stehen 監視されている

次の例では，P-N形が属格名詞句によって修飾され限定されており，不可算ではなく，個体＝特定的な可算解釈が成立する．(Kiss 2007の例)

(10) Irak ist gemäß der Waffenstillstandsresolution zur Beendigung des Golf-Krieges verpflichtet, seine Massenvernichtungswaffen und deren

Produktionsanlagen unter Aufsicht der UN zu zerstören.（イラクは湾岸戦争の終結のための停戦決議によって，国連の監督の下で自国の大量破壊兵器とその生産施設を破壊する義務がある）

(10)のように可算解釈を要求する限定的な修飾句を伴うP-N形は例外的ではない(*unter Androhung einer Strafe*=「処罰するという脅しで」, auf Initiative des Bürgermeisters=「市長の発議で」等). (10)のような例から，可算名詞のP-N形の存在が明確になる(Kiss 2007). 従って，可算・不可算の両義性を持つ名詞と特定の前置詞によって不可算解釈が促進されるとしても，不可算化がP-N形の存在理由のすべてではないということが分かる.

3. P-N形の統語的認可

3.1 動詞項としてのP-N形の可能性

では通常，可算解釈である名詞におけるP-N形はどのように統語的に認可されるのか？ 1節で見たように，前置詞句は統語的には，項，付加部，述語の一部として現れる．しかし，P-N形は，動詞や形容詞が選択する項（補部）の位置にはほとんど現れない.

(11) a. Er freut sich über {das Geschenk/*Geschenk}.
彼はその贈り物を喜んでいる
b. Er ist mit {dem Auto/*Auto} zufrieden. 彼はその自動車に満足している

(12) He put the book on {the desk/*desk}.

(11),(12)にあるように, sich über X freuen（を喜ぶ）, mit X zufrieden（に満足して）, put Y on Xのように，項(Xの部分)として選択されるPPでは項としてのDPが要求される．項は述語から特定の意味役割(主題, 場所等)を付与されるもので，意味役割を担う項は独立した指示対象を指示しなければならない（特定的な対象でも，不特定の対象でもよい）．指示性を担うのは名詞自体でなく，限定詞Dである（特定対象を指示する定冠詞，不特定対象の存在を表す不定冠詞等）．そのため無冠詞NPは, 項の位置では認可されない（無冠詞複数名詞，物質名詞は除く．Chierchia 1998, 吉田 2009). 従って項は，限定詞を伴うDP（または無冠詞複数NP）でなくてはならない（putの <[動作主] [主題][場所]>の項にDPが対応する）．ただし，この一般化には例外がある．それは，目標を表すPP項を取る動詞(go等）と結びつく英語の前置詞句である.

(13) She went to {school/church/college}.
彼女は学校へ/教会へ/大学へ行った

移動を表す動詞goは目標を表すPPを選択し，前置詞としてtoを取ることが多い．その意味で(13)の前置詞句はgoの補部＝項であるが，P-N形が現れる．She went to the school.とDPを使うことは可能だが，(13)とは異なる意味になる（本来の目的ではなく,「特別な用事でその学校へ出かけた」). (13)はgo to NP全体として習慣的活動(activity)を表す，あるいはステロタイプ的意味（学校へ勉強に行く，教会に礼拝に行く，大学へ勉強に行く）に拡大しており，特定の学校や教会という目標に対する指示性は希薄化している(Stvan 2007). 言い換えると，go to schoolという述部全体で,「学校へ（勉強しに）行く」という習慣的活動の意味を表し，*to school*部分は述語の一部（非項）として組み込まれている．ドイツ語では場所・移動のP-N形は英語ほど多くはなく，auf See sein (航海中である), *nach Hause* gehen（家へ帰る）, *zu Hause* sein（家にいる), *zu Bett* gehen（床につく）くらいしかない(Helbig & Buscha 2005). その代わりに，完全なDPでなく，P-D融合形が多用される傾向がある.

(14) Sie geht {zur Schule/zur Kirche/zur Uni/zum Bahnhof/ins Kino}.
彼女は（学校へ/教会へ/大学へ/駅へ/映画館に}行く

融合形zur (<zu der 女性名詞), zum (<zu dem 男性・中性名詞), ins (< in das 中性）が現れる場合，対象物の指示性は希薄であり，（すべてではないが）英語のP-N形と同様の習慣的活動の含意が生じることがある．一方，完全形の場合は，対象物への指示性・特定性が強調され，また，特別な用事という含意が出ることもある(zu der Schule gehen そ

の学校へ（特別な用事で）行く）．この意味で，P-N形と融合形の違いはあるものの，英語の場合と同じような意味で，P-D融合形は完全なP-DP限定句と対立する傾向がある(=15). [3)]

(15) 英語： 完全なPP (P+DP) ⇔ P-N形
　　ドイツ語： 完全なPP (P+DP) ⇔ P-N形・P-D融合形

つまり，移動の目標を除いて，項としてのP-N形はほとんど現れないという結論になる．

3.2 述語の一部，付加部としてのP-N形

項以外のP-N形はどうか？既に3.1で見たように，移動動詞のP-N形（V+ P-N, go to school/to hospital, nach Hause gehen)は述部の一部に取り込まれたもので，指示表現ではないので，P-Nが認可されると分析できる（4節参照）．これ以外の場合，P-Nの表れは基本的に随意的な付加部（副詞句）に限定される．次の(16)の例は，動詞によって選択されない副詞句（付加部）であり，原因・様態・手段などを表す．

(16) a. Aus Anlass einer Feier ist die Fakultät geschlossen. ある式典をきっかけにして学部は閉鎖された．(Meola 2000: 105)
　　b. Er hat auf Basis dieser Hochrechnung sein ganzes Geld investiert. 彼は，この予想最終値をもとに，全財産を投資した．(Meola 2000: 107)
　　c. unter (der) Führung (Leitung) eines Fachmanns 専門家の指導のもとに
　　d. einen Brief mit (per) Luftpost schicken 手紙を航空便で出す

(16a,b)のように，NP補部を伴うPPの場合，P-N形の名詞Nの実質的意味は希薄化し，複合前置詞化している（有田 1992）という見方も可能だろう(Anlass=「きっかけ」，Basis=「基礎」)．しかし，(16c-d)では，活動や手段を表す名詞(Führung=「指導」, Luftpost=「航空便」)は実質的意味を伴っている．後者のような場合，無冠詞形が前置詞の存在によって認可されていることは，次の対比でも明らかである．

(17) a. I will go to school [$_{PP}$ by bus].
　　b. *(A/The) bus came.

busのように，個体と関連する名詞はデフォルトで明らかに可算的であり，(17b)のように主語位置では冠詞＝限定詞が必要である．項は指示的でなければ機能できず，限定詞Dを必要とするからだ．しかし，交通手段を表すbyという前置詞の補部位置では無冠詞でよい．前置詞句by busは，動詞によって選択されず，動詞句を修飾する付加部として機能するため，少なくとも統語的には指示性は要求されない．項 vs. 非項（付加部，述語）のこの対比は，次のLongobardi (1994)の一般化に対応している．

(18) 名詞的表現が項(argument)となるのは，語彙的なDが伴っている場合に限られる．

述部（の一部）の場合も，名詞的表現では冠詞は必要とされない場合がある．

(19) Peter ist *Komponist*. (Peterは作曲家だ)
　　論理表示（1項述語)：Komponist(*Peter*)

しかし，(18)は，項のDPの制限を規定しただけで，非項の限定詞の有無については述べておらず，(16)(17)でPPに限定詞が現れることができないことは説明していない．(1b)のように，付加部のPPでも冠詞付き限定句DPが現れるので，非項には冠詞がある場合とない場合とがある．この問題の分析については，意味論的な分析が必要になる．

4. P-N形の意味論的分析

4.1. P-N形，P-D融合形の分類

次にP-N形の意味を分析する．本稿では，前置詞句について意味論的考察を詳細に行う余裕はないが，おおまかに空間的意味と非空間的意味（様態等）に大別して分析する．英語のP-N形を例に取ると，次のような分類が可能である(Stvan 2007).

(20) 英語のP-N形の分類
(Stvan 2007, Baldwin et al. 2006)

場所	制度	メディア
at home	at/to school	on film
at sea	in/to church	on TV
at table	on campus	to video
in/to bed	at temple	off screen
in hall	in hospital	in radio

メタファー	時間	手段/様態
on ice	at breakfast	by car
at large	on lunch	by train
at hand	by night	by hammer
at leave	by day	by computer
at liberty	...	via radio

このうちメタファーはイディオム的で，Nも大部分不可算的(ice, liberty)である．また，時間の意味もNの個体性が曖昧で，不可算的と考えられるので，ここでは度外視する．これらを除くと，場所的・制度的意味(at, in, on等)と手段・様態意味(by, via)が残る．場所と制度的な領域ではどちらも空間前置詞が使われており，空間・場所的意味と関連する．ドイツ語に関する類似の先行研究はないが，(20)との類推で例示すると次のようになる．

(21) ドイツ語のP-N形，P-D融合形

場所（方向）	制度	メディア
zu/nach Hause	zur Schule	auf dem Film
auf (in) See	in der Kirche	am Bildschirm
zu (bei) Tisch	im Krankenhaus	auf Tonband
zu Bett	im Gefängnis	im Radio
ins Bett	vor Gericht bringen	

手段/様態	様態/原因/その他
mit dem Auto	auf Antrag
mit dem Zug	aus Anlass
mit (dem) Computer	mit(in) Anspielung
mit (per) Luftpost	unter Androhung
mit Vorbehalt	ohne Zuschlag

ドイツ語で顕著なのは，空間的・場所的意味（場所・制度）と，手段・様態意味においてP-N形とP-D融合形が現れることである．in der Kirche（教会で）のような融合を許容しない女性名詞の定冠詞die系列と，mit dem Zug（電車で）のような標準語では融合ができない前置詞auf, mit, ohne, unter等を除けば，P-N形か融合形である．また，様態・原因は，ドイツ語の方がP-N形が多いように思われる．つまり, 英語であれドイツ語であれ，(20)(21)で挙げた領域に属するPP補部の名詞的表現は，可能な限り完全な限定詞Dを回避する傾向（無冠詞かP-D融合形）があることが分かる．特にP-D融合形に関して言えば，an, inと男性・中性名詞の与格，中性対格，zuと男性・中性・女性名詞与格の組み合わせでは，ほぼ義務的に融合が起きる(am, ans, im, ins, zum, zur).

4.2 空間・場所関連のP-N, P-D形

さらに，空間・場所関連のP-N形，P-D形を詳しく見よう．ドイツ語の前置詞の意味分析については多くの先行研究があるが(Schröder 1987, Bierwisch 1988 etc.)，Bierwisch (1988)は，空間意味の前置詞の範疇化と意味について，例えばüberを例に(22)のように記述し，それに基づきWolke über Berlin（ベルリンの上方の雲）という名詞句修飾PP+NPを分析している．

(22) /über/; [−V, −N, −Dir]; λy[λx [x [ABOVE y]]]
音声形 範疇特性 Theta-Grid (意味形式)

(23) a. über Berlin
b. λx [ABOVE(x, Berlin)] (=ベルリンの上にあるxの集合)

(24) a. (eine) Wolke über Berlin
b. [CLOUD(x) & [ABOVE(x, Berlin)]]
(24a)の意味分析

Bierwischによれば，方向性のない(−Dir)場所のüber (=above/over)は，個体xと場所yの空間的2項関係を表す．ABOVEは空間関係を表す意味述語であり，さらに概念構造として位置関係を精密化できるが，ここでは概念構造には立ち入らない(Bierwisch 1988)．(23a)のüber BerlinというPPでは，個体を表すBerlinが場所項として代入され，(23b)

の１項述語の意味となる．これが名詞を修飾する付加部となる(24a)は，(24b)の意味になる（「雲xであり，かつBerlin上にあるxの集合」）．他の空間意味を表す前置詞も基本的にこの方法で分析できる(auf →意味述語ON, in→意味述語IN, an→意味述語AT, unter →意味述語UNDER等）．しかしこの分析では，場所項は，個体を表す意味タイプであり，固有名詞やdie Stadt（その町）のような定名詞句はよいが，無冠詞NPは個体の集合を表すので個体とは合致せず，前置詞の場所項yに代入できない．従って，(25a)は逸脱的になる．

(25) a. #Hans liegt in Krankenhaus.
(Hansは病院で寝ている）（#:意味的逸脱）
b. # [BE(H) & [IN(H, <u>HOSPITAL</u>)]]
(※H=Hans)
c. (cf. Hans liegt in dem Krankenhaus.→ BE(H) & IN(H, ιx[HOSPITAL(x)]))
（ι は唯一性を表すイオタ演算子．ιx[HOSPITAL(x)]は病院である唯一のxという個体）

(25b)の意味は適切ではない．INは個体と場所（個体）の2項関係に対応するが，ここでは場所項が個体の集合(<e,t>タイプ)であるHOSPITALとなっており，個体に対応せず，意味不適合である．実際，他の無冠詞NPの結合（in Zimmer（部屋で），in Resaurant（レストランで））等も容認できない．そこで，英語のP-N形とドイツ語のP-D形は基本的に意味的に等価であるとして，可能な代案として，次の(26c)のような表示が考えられる．

(26) a. Hans liegt im Krankenhaus. (Hansは入院している)
b. Hans is in hospital.
c. [BE(H) & (∃x) [HOSPITAL(x) & IN(H, x)] & (∃y)[CURE(y, H)]]

P補部の無冠詞NPあるいは融合形の場合のNPは，1項述語を表す普通名詞と考える．実際，融合形も指示的意味は希薄であるので，P-N形と融合形には隠れた不定冠詞があると考え，HOSPITAL(x)という述語として解釈し，変項xが存在量化子∃によって束縛されると仮定する．また，(26a,b)は単に主語の個体が病院内部に空間的にいるというだけでなく，病院の典型的な機能である「治療を受ける（入院している）」といった習慣的な意味（あるいは活動的な意味）が加わる(Stvan 2007, McIntyre 2008, Swart & Zwarts 2009)．そのため(26c)は，「Hansが寝ていて，Hansがその中にいる病院xがあり，誰かyがHansを治療している」という意味表示になる．ここでは，習慣的な意味は語用論的な含意というより，語句の慣習的意味として意味的に内在化されていると考える．

P-N形やP-D融合形の名詞句は，定解釈よりもむしろ不定の解釈を受ける．これはweak definite（弱定名詞句）と呼ばれる定名詞句と共通する特徴である(Carlson & Sussmann 2005)．go to *the store*, on *the radio*のように，唯一性も既知性も前提されずに談話において定名詞句で導入されるものが弱定名詞句であり，これらは不定存在の解釈となる．P-N形(27a)と弱定名詞句(27b)の場合，VP省略において同じ場所（刑務所，店）を指示することも，別々の場所を指示することもできる．これは(27d)の不定名詞句のふるまいと近い（特定読みと不定読み）．一方，強い定名詞句の(27c)は，同じ指示対象でないとVP省略を許さない（「同じ本を読んだ」）．

(27) a. Fred went to jail, and Bob did, too.
（同じ刑務所でも別の刑務所でもOK）
b. Fred went to the store, and Max did, too
（同じ店でも別の店でもOK）
c. Sally read the book, and Jane did, too.
（同じ本はOK，別々の本では不可）
d. Sally read a book, and Jane did, too.
（別々の本が普通だが，同じ本でもOK）

しかしながら，P-N形とP-D融合形は，弱定名詞句とも異なる点がある．P-N形とP-D形の場合，不定の対象の存在は含意されるだけであり，実際には対象の存在は明示されない．これは，代名詞による照応関係において明確に現れる．次の(28)では，P-D融合形，P-N形の補部である*hospital/Krankenhaus*(病院)を後続文の代名詞esやitで指示することは困難である．

(28) a. Hans liegt im Krankenhaus$_1$. *#Es$_1$ steht neben dem Rathaus.
b. John is in hospital$_1$. *#It$_1$ is next to the city hall.

(29) a. Hans liegt in einem Krankenhaus$_1$. Es$_1$ steht neben dem Rathaus.
b. John is in a hospital$_1$. It$_1$ is next to the city hall.

一方(29)のように，明示的な限定詞(定冠詞・不定冠詞や数量詞，所有代名詞等）があれば，照応関係が可能になる．この対比は，「a/ein, the/derのような明示的な限定詞(定冠詞・不定冠詞や数量詞，所有代名詞等）がないと，照応可能な談話指示物(discourse referent, Karttunen 1976)が談話の中に導入されない」という談話指示の制約によって説明される．しかし，このことは，(26c)の意味解釈ではP-N形，融合形の意味を正しく表示できないことを意味する．また，(26c)では，発話状況においてHansがある病院の内部空間にいなければ真理条件的に偽である．しかし，(26a,b)はそのような強い主張はない（発話状況の前後の一定の時間帯で病院内にいれば真）．そこで，(26c)を修正して，次のような表示に変更しよう．

(30) (l,x)[BE(H, l) & [HOSPITAL(x, l) & IN(l, x)] & (∃y)[CURE(y, H, l)]]
(l=空間時間的変項＝事象を表す．空間時間的変項l, 個体変項x, yが導入され，個体Hansと病院である場所個体xは時間空間項lにおいて存在し（存在事象l)，lは，場所xと「中にいる」関係にあり，事象lで他の存在者yがHansを治療する）．

(30') (<u>∃l,x</u>)[BE(H, l) & [HOSPITAL(x, l) & IN(l, x)] & (∃y)[CURE(y, H, l)]]

l変項は，Davidson流の状況・事象(event)項であり，このl変項を介して行為者の動作・状態が表される．病院であるxも事象lにおいて存在するが，(30)のように，l,xは変項のままであり，これを束縛する演算子は付与されていない．よって，lもxも明示的に存在が表されているわけではなく，談話指示物を導入することはない．(30)の変項l,xは，最終的に束縛演算子がなければ，(30')のように，VP内においてデフォルトで存在閉方(existential closure)として存在量子∃によって束縛されはするが，これには談話指示の機能がないものとする（同一指示の解釈がなされてからVP閉方が起きる）．また，Hansと病院xは空間的述語INによって直接関係するのでなく，事象lがxとINの関係にあると分析する（Hansがいるという事象がxの内部で起きている）．これによって，発話状況におけるHansの物理的な空間関係への制約は緩められる．

一方，Stvan (2007)は，英語のP-N形は，既知性・熟知(familiarity)の解釈を伴う定の指示表現として機能すると主張している((31)はStvan 2007の例).

(31) I just moved to [a new town]$_1$ last year. My dad was in [town]$_1$ the weekend...

(31)のMy dad was in townのtownは，my town/the townの解釈で，話者・聞き手にとって既知の対象を表す．(31)の先行文でa new townという新情報によって指示対象が導入され，この指示対象をin townのtownによって照応的に指示できるとStvanは主張する．しかし，これは語用論的な推論（会話の含意）によるもので，P-N形自体にa/theなどの限定詞に対応する定表現の指示能力があるわけではない．というのは，(31')のように，in townのみで談話指示物を導入し，それを後続文のitで照応することはできないからである．言い換えれば，P-N形in townの裸NPは上で述べた意味での変項xを導入するだけであり，既存の談話指示物とリンクできるが，それ自身では談話指示物を導入しない．よって(31)の場合は，(32)のように，a new referentで導入された談話指示物dに対して，in townの変項が談話文脈的に既に談話状況にある指示対象dと結びつく．

(31') John was in [town]$_1$ the weekend. *??It$_1$ has a lot of historical buildings and sightseeing spots.

(32) a. ∃x[TOWN(x) & NEW(x) & MOVE_TO(I, x)] & x = d (談話指示物導入)
b. ∃l[BE(MY_FATHER, l) & TOWN(l, x1)] & x1⇒d (談話指示物dと変項の一致）
(前文で，談話指示物 d (=new town)が導入され，後続文のx1(town)はこのdと指示関係を確立する）

P-N形が多くの場合形容詞などで修飾できない事実はどのように説明できるか？

(33) a. *John is in new hospital.
b. John is in a/the new hospital.

(34) a. (l,x)[BE(J, l) & [NEW_HOSPITAL(x, l) &
↑_____
IN(l, x)] & (∃y)[CURE(y, J, l)]]
_____↑不整合

(34) b. ∃x∃l[BE(J, l) & [NEW_HOSPITAL(x, l) & IN(l, x)]]

(33a)の*in new hospitalのように，名詞が形容詞で付加語的に修飾できない場合がある．(33a)の意味表示は，(34a)となり，場所項としてNEW_HOSPITALであるxが導入されるが，この意味述語NEW_HOSPITAL(x, l)と，ステロタイプ意味に対応するCURE(y, J, l)との関係が整合的でない（百科辞書的な日常知に蓄積されていない）．次の条件（意味公準）がこれを表す（ここで，HOSPITALとNEW_HOSPITALなどの下位集合は別々のカテゴリーである）．

(35) ∀z∀l,x[[HUMAN(z,l) & HOSPITAL(x, l) & IN(l, x)] → (∃y)[CURE(y, z, l)]]
人間zと病院xが事象lにいて, l,xが「内にいる」関係にあれば，そのzをlで誰かyが治療している事象がある．

ステロタイプ的意味の(30)が(35)の条件に支えられているとすれば，形容詞が付加された場合は，(33b)のように明示的な冠詞（不定冠詞）の導入によってDPとして生じる必要がある．

場所・空間意味のP-N形・P-D形がしばしば総称的な意味で使われることも，そこに場所の変項が導入されるということによって説明できる．次はStvan (2007)の例である．

(36) An amendment to the Senate's anti-drug bill would have barred alcohol companies from sponsoring any sort of event at all <u>on campus</u> (on campuses).

Stvan (2007)によれば，(36)のP-N形on campusは裸複数形on campusesに置き換え可能であり，「どのキャンパスでも」という総称解釈になる．Stvan(2007)はP-N形の総称表現を種指示表現(kind-referring expression)と述べているが，種(kind)は個々の時空を超えた抽象的な上位概念であり，直接的にONのような具体的な空間関係とかかわることはできない．そこで，全称量化子に似た総称演算子GENが現れて変項xに作用し，VP内存在量化ではなく，総称演算子がP-N形が導入する変項xを束縛するものとなる．この分析では，P-N形の場所項は，上と同様に変項を導入する個体の集合表現のままである．

(36') $GEN_{x,l}$[[CAMPUS(x, l) &
∃y[AMENDMENT(y)]]→ BAR(y,…l)]
（すべてのキャンパスxと状況lで，反麻薬法案の改正があれば，…阻止されただろう）

制度的場所以外の空間的前置詞の場合も(30),(35)と並行的な意味（付加的な情報＝ステロタイプ･習慣的意味）が加わる．at sea/auf See (「航海中」という情報)，in bed/zu Bett (「寝ている」)，at table/zu (bei) Tisch（「食事中」）zu Hause /at home（「自分の家にいる」）なども同様である．

移動動詞の項として現れる目標のP-N, P-D形も同じような観点から分析できる．

(37) a. Mary went to school. b. Maria ging zur Schule.
c. ∃l,x[SCHOOL(x, l) & MOVE(M, l) & AT(M, $l'_{(l<l')}$)] & [LEARN(M, l')]]
(学校であるxが事象lにあり，lにおいてMaryが移動し，l以降のl'においてMaryは学校xに着いていて，l'でMaryは学ぶ活動を行う，そのようなlが存在した)．

以上から，空間的・制度的なP-N形，P-D融合形では，前置詞と名詞が各々の意味の合成による意味を基盤とし，それに習慣的活動などの付加情報が加わることが分かる．

4.3 手段・様態関連のP-N, P-D形

空間関係のPPでなく，手段や様態関連のPPにおけるP-N形，P-D融合形も，前置詞の意味述語は異なるが, 前節の分析と同じ方向で分析できる．

(38a)の意味表示である(38c)でも，事象lと，バスの集合要素xの存在は非明示的である（照応的関係を作れない）．ただし，ドイツ語の(38b)では定冠詞が明示的に現れており指示的に使うこともできる（特定のバス）．(38b')はその意味表示であるが，定冠詞の意味は，唯一性を表すイオタ演算子ιで表示させる．

(38) a. Peter comes by bus. b. Peter kommt mit <u>dem</u> Bus.

(38) c. ∃l,x[COME(P, l) & [BUS(x, l) & MEANS(1, x)]]
（Peterが来るという事象lがあり，lにおいてバスであるxが事象lの手段関係となる．）

(38b') ∃l [COME(P, l) & ιx [BUS(x, l)] & MEANS(1, x)]]
（Peterが来るという事象lがあり，lにおいて特定のバスであるxがこの事象lの手段関係となる．）

一定の前置詞句は無冠詞になる傾向があるが，これはある程度意味論的に説明できる．例えば，ohne（なしで）の場合，否定＋不定冠詞＋Nの解釈が可能で，不定冠詞が隠れている．

(39) a. ein Hemd ohne Ärmel(袖なしのシャツ)
b. λP∃l∃x [SHIRT(x,l) & NEG$\exists_y$[SLEEVE(y, x) & P(x,l)]]
（シャツであるxがある状況lで存在するが，そのlでxの袖であるyがない）

このような場合，前置詞Pの中に意味的には限定詞（不定冠詞＝存在量化）の意味が編入されており，NEG∃の意味の場合，無冠詞となると考えられる（ohne seine Hilfe「彼の助力なしで」のような限定詞付きのDPの場合，当然編入は起きない）．手段・様態のP-N形，P-D融合形の名詞句は，論理関係と関連するので，個体(object)の存在だけではなく，唯一的･抽象的な種名辞，下位種(kind, sub-kind, sortal term)を表すこともできる．この場合，談話状況における個体の存在は要求されないが，唯一的カテゴリーの存在が前提となり，定の解釈になる．例えば(40)では，手段を表すPPが現れるが，手段の下位種が対比させられ，どの下位種類が一般に容易かが問題になる総称的主張となる（コンピュータか他の機械か，人の手によるか等）．

(40) a. Man kann mit Computer alles machen.（コンピュータではなんでもやれる）
b. GEN_l POSS[∀x[THING(x) & MEANS(l, $COMPUTER^k$)]→ DO(PEOPLE, x,l)]
(多くの状況lで次のことが可能である：xがもので，コンピュータという種をlにおける手段とするならば，すべてのxについて，人々はlでxを行うことが可能である)．

原因などを表す前置詞句でもP-N形が可能である．この場合は，名詞句は可算で定の解釈（唯一性）を受けると考えられる．

(41) <u>Aus Anlass einer Feier</u> ist die Fakultät geschlossen.
∃l∃x[CEREBRATION(x,l) & ι_z[CAUSE(z,x,l)] & ∃y[CLOSE(y, ιx_l[FACULTY(x_l)], l)]
(ある状況lで式典xがあり，xがlの原因zとなって，zのために，lにおいてその学部が閉鎖された)

aus AnlassのP補部は，定名詞句の解釈であり，事象lの唯一的な原因を表す．可算名詞句の場合，通常定冠詞が生じる文脈である．ここでなぜder (=the)のような明示的な定冠詞が必要ないかが問題となる．これについては，次のような理由が考えられる．第一に，ここに現れる名詞(Anlass「きっかけ」)は抽象名詞であり，可算的であるとしても，種名辞の意味，即ち固有名詞に近い意味で唯一性が保証される．この場合，「ある式典というきっかけ」という抽象名詞は，Rotwein（赤ワイン）などと同じような意味で原因についての下位種(sub-kind)を表し，また，der Mond(月)と同じように唯一名詞と似た指示値をもつ（一つの対象のみ）．ゆえに，定冠詞がなくても一義的な指示関係が成立する．

(42)

Anlass — Anlass einer Feier /Anlass einer Reparatur/…
種 (原因)　個体 □　個体 □　…
抽象的な下位種

第二に，このような名詞は，文の主語や目的語のような動詞の項ではなく，前置詞の補部であり，また，前置詞は付加部として機能するために指示性が冠詞によって明示される必要はない．しかも，P補部のNPは上に挙げたように，唯一名詞の意味を伴い，個体を指示する．ゆえに，統語的必要性を免れ，意味論的にも一義的に個体を指示できるために，経済的理由で無冠詞として具現する（Chierchia 1998の意味では，非明示的に定冠詞の意味ιが導入される）．

次のようなP-N形では，前置詞の空間的意味がほとんど消失してしまっており，様態や状況・条件を意味するものになっている．これらが堅固に結合してしまうと語彙化され，aufgrundのように，純粋な前置詞表現になっていく可能性がある（文法化現象, Meola 2000）．

(43) auf Anfrage　auf Aufforderung ～の指示で
（手段・方法）
in Anspielung　をほのめかして
unter Androhung　～の脅かしで
（様態・条件・状況）

auf, in, unterなど様態関連のP-N形を作りやすい空間前置詞，あるいはその他，mit, ohneなどの手段・様態前置詞があるが，これらを詳細に検討することは今後の課題である．英語の場合，by bus/by computerなどの手段，without computerなどの否定様態を別にすると，様態・状況の意味ではドイツ語ほどP-N形は用いられず，定冠詞theが現れる傾向が強いようである(in accordance with, on the basis of, under the instruction of等).

いずれにせよ，様態・手段関連のP-N形と，場所・制度的なP-N, P-D融合形との違いは，前者においては，ステロタイプ的・習慣的意味がないことである．

5. 考察　— P-N形とP-D融合形の意義

以上の分析から，P-N形とP-D融合形の統語的・意味的特性について以下のようにまとめることができるであろう．

(44) P-N形とP-D融合形の統語的・意味的特性

(I) 英語のP-N形 (to school等)とドイツ語のP-N形(zu Hause等)とP-D融合形(zur Schule等)は，冠詞の力が弱かった古い時代の用法を受け継いでいる部分はあるが，今日でも生産的に作られる．そこに現れる名詞句は不可算解釈と可算解釈の場合がある．デフォルトで不可算解釈の場合，限定詞Dは必要ないが，様態・手段等の前置詞(auf, durch, mit, unter)が可算から不可算への解釈を比喩的に引き起こす場合がある．

(II) 可算解釈の名詞との結合でP-N形やP-D形が現れるのは，基本的に述語の一部や付加部として機能する前置詞句に限られる．これは，「項として機能する名詞表現は指示的でなければならない」，従って指示性を担う限定詞Dが要求されるという制約で説明できる．例外は，go to schoolのように述語を一体的に形成する目標句(to school/church/hospital)であるが，この場合，目標句は，述語の内部に意味的に編入(incorporate)されていて指示性がない．一方，付加部の場合，項ではないので指示性を担う限定詞を必ずしも必要としないという統語的環境の制約によって説明できる．ドイツ語ではzum, imなどのP-D融合形があるので，英語ほどP-N形は多くないが，ドイツ語のP-N形とP-D融合形が現れる環境は，英語のP-N形と多くの場合一致している．ただし，P-D融合形には，定冠詞と同様に指示的用法もあり，無冠詞形と定名詞句の中間的存在だと言える．

(III) 付加部のP-N形，P-D融合形は，場所空間，制度的場所，移動目標，様態・手段の意味などに分類できる．場所空間意味（移動目標）と制度的場所の意味の場合，対象物の不定の存在が（明示的ではないが）含意され，さらに場所項に付随した習慣的・ステロタイプ的意味が加わることが多い．無冠詞形，融合形の場合，基本的に指示対象を一義的に指示する能力は希薄であり，不特定解釈も文脈的には可能であるが，明示的に照応関係として確立することはできない．これは裸のNPは，

談話指示物を導入するのではなく，変項を導入するだけであるということによって説明できる（よって，不定存在の含意や総称解釈は可能だが，定の解釈は困難になる）．その際，英語では，at, in, on, toなどの前置詞が多く使われ，ドイツ語でも対応するan, auf, in, zuが現れる．一方，様態・手段・状況の付加部の場合，対象の不定存在の意味か，あるいは下位種の抽象的意味（唯一の存在物）として解釈される．いずれにせよ，冠詞が現れないP-N形と，前置詞と定冠詞が縮約したP-D+NPの意味は，基本的に合成的原理によって算出される．つまり，前置詞の意味と名詞の意味から派生する．習慣的・ステロタイプ的意味はP-N形，P-D形の文字通りの意味に付加され，そこに慣習的に組み込まれる．

IIの付加部でのP-N, P-D融合形の現れは，最適性理論(optimality theory)に基づく最適な表示からも説明できる．P-N, P-D融合形は，名詞表現の中で限定詞Dを要求する一般的制約に違反しているが，それより重要な制約は守っている（空間意味におけるステロタイプ的意味の実現，様態・手段における唯一名詞の場合に限定詞は不必要になるという条件）．表現形式は，明示的な冠詞がないという意味で「最小」であるが，「最大の意味」を実現しているという意味で，きわめて経済的な表示であり，固定的なイディオム表現には還元できない(Swart & Zwarts 2009)．とりわけ，ドイツ語の場合，P-N形とP-D融合形という２つのより経済的な表現形式があることによって，明示的な限定詞と，非明示的なP-N形と，中間的なP-D融合形式の相補的関係が保たれている．ただし，どの場合にP-N形でなく，P-D融合形となるかはさらに詳しい分析が必要である．

P補部において，NPからDPへの投射が抑制される点について，理論的には，Pが名詞Nの機能的な「拡大投射(extended projection, Grimshaw 2005)」として機能するため，一定の環境下でDの投射が抑制される可能性も考えられる．

(45) $[_{PP(=N'')}\ [_{P0}$ by $]\ [_{NP(=N'')}\ [_{N0}$ bus$]]]$
(PPはNの拡大投射)

前置詞Pが名詞句NPの上に新たな範疇を投射するのでなく，NPと連続した形でNの拡大投射として（Dの代理）としても機能するという考えである．とりわけ，格付与と意味役割の付与の点でPは機能的役割を果たすとも考えられる．Waldmüller (2008)のP-D融合形の分析（P+Nの屈折要素+裸NP）も拡大投射に近い．しかし，項としてのPPではP-N形は移動目標を除けばあまり現れないので，この可能性はここでは追求しない．

unter Aufsicht der UN (国連の監督の下で= (10))のように，様態・原因のPPの場合，可算・定の解釈が可能であるが，無冠詞になる．その理由は「非項である」以外に，Chomsky (1981)の意味での語彙統率 (lexical government)による説明が考えられる．主語の環境では，音声形のない要素（定冠詞対応のι= 唯一性オペレータ）は語彙統率されないので，ECP（空範疇原理）に違反するが，語彙範疇としてのPの補部である環境では音声形のないιが認可される．

(46) a. $[_{IP(=S)}$ *ι NP I VP$]$ (統率されず)
b. $[_{PP}\ [_{P}$ <u>unter</u>$]\rightarrow$ ι NP$]$ (語彙統率)

しかし最新の極小主義理論では統率概念もECPも廃止されたので，これを直接採用することはできない．従って本稿では（不可視演算子による）意味論的な説明を行った．

以上，本稿ではドイツ語・英語にしばしば現れる前置詞＋無冠詞名詞，およびドイツ語の前置詞と定冠詞融合形を伴う前置詞句の統語的分布と意味論的特性を検討した．空間前置詞から様態的意味への変化は，認知言語学のメタファー概念などによって分析できるかもしれないが，本稿の枠組みを超えるので，ここでは空間前置詞を基礎とする基本的意味を考察した．P-N形とP-D融合形は単に特殊な現象というだけでなく，統語的・意味的な動機づけをもっており，ドイツ語や英語では頻繁に用いられる．今後は，具体的なコーパス分析などによる定量的分析も必要であろう(Kiss 2007, 2008).

注

1) 本研究は，日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究(C)）「ドイツ語・英語の無冠詞名詞の統語論的・意味論的対照研究」（平成21 ～ 23年度, 21520441, 吉田光演）に基づいている．

2) Waldmüller (2008)は，zumのような融合形は，P+DPではなく，屈折素性をもつP+NPであると分析する．zum Hotel (<zu dem Hotel)では，NPの屈折情報-(e)m（単数･中性･与格）は前置詞zuに付加されるが，(demのd-が担う）DPの主要部をなすDの定性は付加されないというのがその根拠であり，$[_{PP}\ [_{P}$ zum $_{[SG,Neut,Dat]}]\ [_{NP}$ Hotel]] のような構造をなすという．この分析は，P-D融合形の弱定名詞句を説明する上で興味深いが，問題もある．zu demからzumの縮約は可能だが，不定冠詞 zu einemはzumにならないので，基底形がP+定冠詞+NP (=P+DP)であることは明らかである．

3) P-D融合形の場合，“Erinnerst du dich noch ans Café Mozart?“(=喫茶店モーツァルトをまだ覚えている？）のようなPP項において融合形が現れることは確かにある（査読者による指摘）．しかしこの例では，名詞句(*Café Mozart*)は固有名詞的な性格であり，融合した定冠詞部分ansは何ら定性(definiteness)に貢献していない．従ってP-D形は，完全形（前置詞＋定冠詞＋普通名詞）とは区別されるべきであろう．例えば，“Gehen wir ins Café!“ (=喫茶店に行こう)と言うとき，話者は特定の喫茶店を想定する必要性はない（特定的であってもよいが）．ただしこの現象は，定冠詞を用いたときにも起きるもので（“Ich gehe in die Kneipe.“=（どこかの）飲み屋に行く），定性のない弱い定冠詞(weak definite)の問題と重なり合っている．この意味ではP-D形の定冠詞は, 不定冠詞*ein* (=*a*, *an*)に近いと言えるかもしれない．

参考文献

Abney, S. (1987) *The English noun phrase in sentential aspect*. PhD Diss., MIT, Cambridge, Mass.

Baldwin, T., Beavers, J., Beek, v.d.L., Bond, F., Flickinger, D. & Sag, I. (2006) In Search of a Systematic Treatment of Determinerless PPs. Saint-Dizier P. (ed.): *Syntax and Semantics of Prepositions*. Dordrecht: Springer, 163-179.

Bierwisch, M. (1988) On the Grammar of Local Prepositions. Bierwisch, M., Motsch, W. & Zimmermann, I. (eds.) *Syntax, Semantik und Lexikon*, Berlin: Akademie, 1-65.

Borer, H. (2004) *In Name Only*. Oxford: Oxford University Press.

Carlson, G. & Sussmann, R.Sh. (2005) Seemingly Indefinite Definites. Kespar, S. & Reis, M. (eds.) *Linguistic Evidence*, Berlin: Mouton de Gruyter, 71-85.

Chierchia, G. (1998) Reference to Kinds across Languages. *Natural Language Semantics* **6**, 339-405.

Chomsky, N. (1981) *Lectures on government and binding*. Dordrecht: Foris.

Grimshaw, J. (2005) Extended Projection. Grimshaw, J. *Words and Structure*, Stanford: CSLI, 1-73.

Helbig, G. & Buscha, J. (2005) *Deutsche Grammatik*. Berlin et al.: Langenscheidt.

Himmelmann N.P. (1998) Regularity in irregularity: Article use in adpositional phrases. *Linguistic Typology* **2**, 315-353.

Karttunen, L. (1976) Discourse referent. McCawley, J. (ed.) *Syntax and Semantics 7*. New York: Academic Press, 363-386.

Kiss, T. (2007) Produktivität und Idiomatizität von Präposition-Substantiv-Sequenzen. *Zeitschrift für Sprachwissenschaft* **26**, 317-345.

Kiss, T. (2008) Towards a Grammar of Preposition-Noun Combinations. Müller S. (ed.) *Proceedings of the HPSG08 Conference*, NICT, Japan. (Ms.)

Löbner, S. (1985) Definites. *Journal of Semantics* **4**, 279-326.

Longobardi, G. (1994) Reference and Proper Names. *Linguistic Inquiry* **25**, 609-665.

McIntyre, A, (2008) *Functional Interpretations: Borderline Idiosyncracy in Prepositional Phrases and other expressions*. Ms. Université de Neuchâtel, Neuchâtel.

Meola, C. (2000) *Die Grammatikalisierung deutscher Präpositionen*, Tübingen: Stauffenburg.

Schröder J. (1987) *Deutsche Präpositionen im Sprachvergleich*. Leipzig: VEB.

Stvan, L.S. (2007) The functional range of bare singular count nouns in English. Stark, E., Leiss, E. & Abraham, W. (eds.) *Nominal Determination*. Amsterdam et al.: John Benjamins, 171-187.

Swart, de H. & Zwarts, J. (2009) Less Form – more meaning: Why bare singular nouns are special. *Lingua* **119**, 280-295.

Waldmüller, E.S.P. (2008) *Contracted Preposition-Determiner Forms in German: Semantics and Pragmatics*, PhD diss., Universitat Pompeu Fabra, Barcelona.

有田潤 (1992)「入門　ドイツ語冠詞の用法」三修社.

吉田光演 (2009) ドイツ語・英語の無冠詞並列名詞句について「欧米文化研究」16, 87-100.